



「日頃心掛けているのは、何事にも好奇心を持つことです」。穏やかな表情でそう話すのは、石川県七尾市で最先端の医療DXを実践する恵寿総合病院の理事長、神野正博氏。

病院内に日本初としてコンビニエンスストアを設置すると、早速レジ係が気になった。コンビニのスタッフがお客さん全員に「おはようございます。ありがとうございます」と明るく挨拶している。それを見ていて「アルバイトがちゃんと言っているのに、ウチの病院の受付は正社員なのになかなか言えないのはなぜだろう」。そこで店の人にどんなマニュアルになっているのかと尋ねたという。万事その調子で素朴な疑問をないがしろにしない。そして、そこで得たヒントから生まれた革新的なシステムも多いという。

この病院は、医師や職員と患者の満足度を高めつつ健全経営を実現するビジネスモデルとして、日本中の病院が注目している。その根幹に好奇心をベースとする神野氏の鋭い観察力と分析力があることは間違いない。

社会医療法人財団董仙会
恵寿総合病院 理事長

神野正博

病院DXを活用し先端医療から 福祉まで「生きる」を応援する 医療と介護の仕組みをつくる

2024年1月1日に発生した石川県能登半島地震で、震度6強の揺れを観測した七尾市。

周辺の公立災害拠点病院が機能不全に陥る中、同市の恵寿総合病院の本館は免震構造だったために甚大な被害を免れた。

断水でも井戸水を医療優先で利用することで、医療を止めなかった。同病院の理事長である神野正博氏は

病院DX（デジタル・トランスフォーメーション）をいち早く導入し、医師や看護師の「働き方改革」を推進させてきた。神野氏に震災後の状況と今後、病院における経営改革と働き方改革への取り組みなどを伺った。

社会を見据えて「使命」を定義 90年代から病院をIT化

伊藤 このたびの能登半島地震に心よりお見舞いを申し上げます。神野さんの恵寿総合病院は、能登半島で唯一の地域医療支援病院として平時から重要な役割を果たしておられます。本日はそうした面と、神野さんご自身についてお話を伺いたいと思っております。まずは恵寿総合病院の理念や特徴から、お聞かせいただけますでしょうか。

神野 病院を開設したのは私の祖父です。祖父は大学卒業後、北海道の病院に赴任し、その後、出身地である神奈川県海老名で病院を開くか、それ

とも祖母の親戚が暮らす石川県七尾で開くかで迷い、最後は古いをやつてもらって七尾に決めたと聞いています。それが昭和の初めのことで、今年90周年を迎えます。当時の七尾は満州やロシアへ行く航路がある港町で、相当栄えていました。おそらく太平洋側より日本海側のほうが発展していたことから、この地に決めたのではないかと思うのです。その時から患者さんを断らず、いつでも容易にかかれる病院にしようということやってきたようです。

ただ創業の精神はそうだとっても、だんだん時代が変わっていきます。そこで私の代になってミッション、ビジョン、バリューをきちんとしようということになり、「先端医療から福祉まで

『生きる』を応援します」と決めました。生きるとは何かと言うとLifeです。Lifeというのは、もちろん生活もありますが、医療の救命救急、それもLifeです。この生命もLifeだし、もつと言えば人生、生まれてから死ぬまでがLifeです。そこで、「先端医療から人生のすべてを応援する」という意味を込めて、医療や介護、福祉、保健を通じて人生すべてを応援することをミッションとしました。

伊藤 それはお父様から理事長を受け継がれてすぐですか。

神野 そうですね。私が病院長から理事長になったのが30代で、もう30数年経つのですが、社会の変化を見据えて決めました。当時の病院の医療は